

〔南風〕

南照寺 寺報 第二号 平成二十五年 春

初夏の候、暑くなつてまいりました。

先月は、とりあえず何かを始めますということ、その紹介かたがた駄文を綴つたのでありますが、刷つたものをお寺の玄関わきに積んでおいても、そう手に取つて見ていただくことはありませんでした。お勤めの会の後に、せめて全部の御門徒に一回は連絡せねば、という話になつたのは当然のことです。いつも私のやることは後手に回るようです。

この南照寺を預かるに当たつて、どのようにするのが良からうかという考へてまいりました。とにかく今出来ること、やつても差し障りの無いことをやるしかないのは確かです。(しかしそのことこそ、私は判断が結構難しいのですね。)

少し、整理します。

・現状維持では、維持できない。

これは、本当のことです。生きて活性化していかないと、どんなものでも減びていくしかありません。ではどうするかですが、一つには、

・御門徒を新規に増やしていく。

と、簡単に書きましたが、難問であるうえにやり方も考えねばなりません。いくつか思いついたり、いただいたりした案を列挙すると、

例① 南照寺の宣伝をする。

墓地を整理して、天王寺周辺のマンション等にチラシ的な物をポスティングしていく、と。そこに、お墓を切つていただく方は、今後御門徒として南照寺とかかわっていくことが条件、ということをお記しておくというもの。

例② 南照寺を開放する。

若い人でも誰でも、気軽に入つて来ていただけるようなイベント企画を考える。

- i 簡単な勤行と座談会。
- ii 小規模な音楽のコンサート。
- iii 参加者が歌う、歌の会的なもの。
- iv 習字、写経の集い。
- v お経の意味を学ぶ、学習会。
- vi お経に自分を問う、聞法会。

等々。

例③ インターネット上にホームページを開いて、南照寺の紹介、今後の予定、相談などを広く知らせる。

と、このあたりまでが可能性として提案されたものであります。そもそも私自身ができるかどうかとも大いに問題ですが、それよりもここまで読んで来ていただいた有縁の方々が、これらのようなことをどのようにお感じになるかが、当方といたしましては一番気にかかるところであります。忌憚ないご意見をいただけたら、幸いです。

しかしそういう会話をできる機会すら、現状持てていないようなことから、やはり時間をかけていかにざるを得ないのが現実でしょう。

寺報の名を「〔南風〕」としましたのは、かつて沖繩の離島へ旅行した時のことを、ふと思ひ出したからです。西表島の南東に、ハイミタ、という浜があります。地図にはハエミダ、と大和言葉になっていたりしますが、「南風見田」と漢字があてられているからでしょう。南からの風を「見る」という感覚が、彼の地では一般的なのだと、不思議な感動を覚えたことでありました。あの時に出会った様々な人たちは、今はどうしているのかしらんという懐かしさと、あの頃の純粹で単純な視点を忘れない、という意味も込めて、もちろん上町台地の南を照らず寺からの微風として、世に問うていこうということであります。とりあえずは、継続して発行していくことを目標としております。

また寺報は「住職からのお手紙」という位置付けで考えておりますので、あまりキチツと構成してありません。あしからず、です。

「住職」、というのは、いまさら言うのも何なのですが、勝手に成る、というものではありません。南照寺の場合、本山を「東本願寺」とする真宗大谷派の任命があつて、初めて「成る」わけです。真宗大谷派のお寺は全国で8000カ寺ともいわれ、それぞれの教区にわかれていて、こちらは「大阪教区」に所属しています。これでもまだ多いので、二十七の「組」(そ、と読みます)に分かれております。南照寺はこのうちの「第二組」に属しており、二組は、約二十の末寺(まつじ、それぞれ各お寺のこと)で構成されています。まあ組とは、小学校のクラスみたいなもの、と考えていただいたら、わかりやすいかと思ひます。

一等最初の住職の仕事は、この「組」の「組会」(そかい、と読みます)に出席することでした。住職修習の前ですから、正式にはまだ住職ではなかったのですが、組長(そちよう、と読みます)さんが早い方が良かるうと、取り計らつてくださったわけです。

ちようど学期半ばに、クラスに「謎の転校生」が入つてきたと思つていただけたらいいかと思ひます。向こうもいぶかしく思つておられるだろうが、こつちだつてさつぱりわからない。葬式や、法事や、納骨などといった、御門徒との直接のかかわりならともかく、それ以外のことについては全く無知でありました。

さて、ここから真宗大谷派なる「教団」の一員としての仕事が始まつたわけで、その巨大な組織の支えと運営の一部を担うことになつたわけです。小学校のたとえで言うならば、それまでに決まつている運動会や学芸会の準備の役などを引き受け、当番や決まり事を覚えて、クラスで取り組んでいる問題を理解して、一日でも早くクラスになじんでいってください、とன்றいましょうか。私にとっては、暗闇を手探りですすんでいくような感じです。

幸いなことに、十年ほど前に三年間のカリキュラムで組まれた大阪教区の学習会、「教学研究院」第六期生として、毎週難波別院まで通つておりましたので、いくつもの大事な知己を得ておりました。全く未知で

あつた「第二組」の住職方の中に、懐かしい当時の仲間の人を見つけた時、嬉しさと頼もしさに加えて、あらためて「ご縁」の不思議を思わずにはいられませんでした。どこでどう人間関係が繋がるかなど、とても人知の及ぶところではありませんまい。

「組会」がどのように扱われているかは、各「組」によつてまちまちなのですが、この「第二組」では二カ月に一回の割合で、「会所」(えしよ、会場のこと)を各末寺持ち回りで開くことに決まつているとのことです。ただ、新任職が決まつたお寺は、その順番を飛び越えて、お披露目の会も兼ねて次の組会の会所となります。

こうして今年の一月二十三日の組会は、南照寺で開かれることになつたわけでした。

様々な要因があつたことは確かなのでしよう。それぞれの住職方の世代交代も関係しているかとは思いますが、驚くべきことに、かつてこの南照寺で「組会」が開かれたかどうかをきちんと知つている方が、どなたもお見えでなかつたということでした。そして新たに、こういう形で本堂に於いて組会を開くことがあつて、南照寺がまた教区の活動に参加していくことになつたということ、皆一様に歓迎し、祝福してくださいました。私としても理解ある「おとな」の住職方中心の、「いじめっ子」のいないクラスに「転入」できて、内心ホツといたしました。これをもって、正式に「仲間入り」した次第です。

しかし実はこのことによつて、スタッフだけの会議だの、「組」の仕事が不可避についてきて、それ相当のエネルギーを当てねばならないのです。これは住職になるにあつて全く想定外でした。いやはや。

・次回の「お勤め」(正信偈、同朋奉讃式)の会は、

六月一五日(その次は七月二〇日)

で、それぞれ第三土曜日になります。

よろしくお願い申し上げます。